

これまでも これからも
この町とともに歩み続ける

スタート



ONAGAWA
100th Anniversary
女川町町制施行100周年
Since 1926

女川

START !!



女川町100年の歩み

宮城県女川町は、2026年4月1日に町制施行100周年という大きな節目を迎えました。女川町が大正に誕生してから、昭和、平成と発展を遂げますが、東日本大震災があまりに大きな傷跡を町に残しました。そこからの復興に向けて、女川町は挑戦を続けています。



大正12年 女川港の埋立(驚神地区)



昭和46年 コバルトライン開通



平成6年 マリンパル女川オープン

大 正			昭 和			平 成																									
1926 (大正15) 年 4 月	町制施行により 女川町となる		1933 (昭和8) 年 3 月	昭和三陸津波		1945 (昭和20) 年 8 月	連合国軍の空襲で 海軍艦艇7隻撃沈		1956 (昭和31) 年 1 月	女川漁港岸壁 埋め立て完成		1960 (昭和35) 年 5 月	チリ地震津波		1967 (昭和42) 年 9 月	女川町議会が 原子力発電所誘致を決議		1971 (昭和46) 年 4 月	牡鹿コバルトラインが 開通		1978 (昭和53) 年 6 月	宮城県沖地震		1984 (昭和59) 年 6 月	女川原子力発電所1号機 が営業運転開始		1994 (平成6) 年 4 月	町営の観光物産施設 「マリンパル女川」が開業		2011 (平成23) 年 3 月	東日本大震災



“戻らぬかつての町並みを想い、女川は少しずつ生まれ変わっていった”

震災からの“復幸”

- ◆ 2011年 7月 町役場仮設庁舎にて業務開始
11月 仮設住宅がすべて完成
- ◆ 2012年 4月 仮設の商店街「きぼうのかね商店街」がオープン(写真①)
- ◆ 2014年 3月 震災後初めての災害公営住宅が完成、入居開始
- ◆ 2015年 3月 JR石巻線が全線復旧。
新・女川駅(写真②)開業、女川駅に併設された町営「女川温泉ゆぼっぼ」がオープン
12月 複合施設「女川町まちなか交流館」、駅前商店街「シーバルピア女川」(写真③)が開業
- ◆ 2016年12月 「地元市場 ハマテラス」(写真④)が開業
- ◆ 2017年 5月 女川魚市場が全面稼働
- ◆ 2018年 9月 女川町新庁舎完成
- ◆ 2024年12月 本土と出島を結ぶ出島大橋(写真⑤)が開通
- ◆ 2026年 4月 町制施行100周年



生まれ変わった女川町の中心部



須田 善明 町長
INTERVIEW



新しいものが
生まれる
唯一無二の町に

Q1. 町制100周年を迎えて所感を

100周年を機に、この地に生きた人々の連綿とした思いに触れ、自分たちもその系譜の中にいるのだとあらためて実感しました。変化を恐れず、町外から来た人々を積極的に受け入れ、新しいものを作りだそうとするマインド「女川イズム」が培われてきました。まさに震災復興の歩みは、その延長線上にあったと思います。実際、女川町民と町外からの人々が、新しい町づくりのコアになりました。「同じ方向を向いてくれるなら、一緒に頑張ろう」というオープンな土地柄が、女川の強みだと思います。

Q2. 特に若い世代が復興の中心となった

先輩方が「責任は取るから」と若い世代を後押しし、町の再建に向けて町民一人ひとりが「こんな町であってほしい」という思いを、様々な場面で注いでくれました。みんなの力、熱量が今の女川を形づくったと思います。行政だけで進めるのではなく、復興の“あり方”そのものを提示し、理解していただけたことが大きかった。復興は長期戦です。行政として、町民が希望を失わぬよう、心を折らぬよう、意思決定を早く、選択肢を提示してきました。一方で将来世代のために、時間軸を長く、未来志向で町づくりの設計を進めました。ここで生きていく意味を見いだせる町にしたいですね。

Q3. 東北電力の女川原子力発電所が立地する

女川原子力発電所とは、町の歴史の半分をともしてきました。東北電力に一貫して伝えてきたのは「とにかく人を大事にしてほしい」ということ。人とは現場であり、住民、地域です。その人々の顔が浮かんでくれば無理な判断、無責任な仕事はできないはず。安全文化も自然に根付くと思います。そして、ここで働き、ともに暮らす地域の一員として、義務ではなく、楽しみながら女川に関わってもらいたい。「何かやりたいな」と思ったら町が支えます。若い世代こそ、この町で、もっと自分たちを表現してほしいですね。

Q4. 女川の未来像は

水産業が主軸なのは変わりません。それに加えて企業誘致も大事ですが、町外の人たちも受け入れ、新しい事業やアイデアが日本一生まれる唯一無二の町にしたい。女川を“挑戦の種を植えたくなる土壌”にし、わくわくする“面白い町”を目指していきます。

【座談会】

紡いできた絆 つないでいく

女川町と東北電力のこれから

東日本大震災から15年。

女川で暮らし、仕事、活動を続ける若手3人に「女川のいま、これから」について語ってもらいました。



特定非営利活動法人
アスヘノキボウ
丹野真人さん (26)

——プロフィール/業務内容——

石巻市出身。仙台市で料理人として働いた後、2020年に女川町へ移住。アスヘノキボウで活動人口の拡大に取り組み、「女川銀鮭広報部」店長として特産品の魅力を発信。移住者の視点で、若い世代に関わり続ける仕組みづくりに挑む。



盆踊りで再び町を盛り上げたい

まずは、2024年に「盆踊り」を始めたきっかけから

崎村 最初は「とにかく町を盛り上げたい」という気持ちがありました。そこで2~3年、自主的にできることはないかと悩み、盆踊りにたどりつきました。老若男女が参加し、昔から地区ごとに開催していた馴染みのある行事です。日本では誰でも知っていますので、町民も受け入れやすいと思いました。24年8月に女川駅前で初開催し、翌年8月も実施しました。予想以上の盛り上がりでしたね。

丹野 僕も第1回から実行委員として加わりました。盆踊りは、コロナ禍でバラバラになっていた人々をつなげる場になったと感じました。週1~2回の打ち合わせで、町外から来た方々も、年齢も立場も違う

70人の顔と名前が一致していく。コミュニティの再結合という意味では大きな成果でした。

崎村 震災後から若い世代を中心に、女川を楽しんでいるという動きがあったのですが、その勢いが次第に落ち着いてきて、コロナ禍が決定打に。築いてきたコミュニティが完全に消滅するという危機感がありましたね。このままじゃ女川が面白い町じゃなくなる、何か動かなきゃと。

竹谷 盆踊りを企画していただき、女川出身者としてとてもうれしかったです。若いメンバーが自発的に女川を盛り上げようと色々と活動してくれている。盆踊りの会場が駅前なものよかったです。東北電力の社宅が駅前にあって、当日、私は夜勤で参加できませんでしたが、子どもたちは屋台などが楽しかったと言っていました。

崎村 嬉しいですね。盆踊りのテーマに“子どもたちの原風景を作る”という側面もある。大学進学などで女川を出ても「子どものころ楽しかったな」という思い出があれば、戻ってくるきっかけになるかもしれない。ただ、僕らだけ楽しんでいると思われるのは嫌で、町民が毎年楽しみにできる祭りに育てていきたいですね。

先輩達の背中を追って

女川町の復興は若い世代が担ったと言われてますね

崎村 震災後、僕の10~15歳くらい上の世代が町を引っ張っていました。須田善明町長らの世代です。あの頃の女川は、町全体が挑戦する空気に満ちていた。僕は当時20代後半で、ただその背中を追いかけているだけで楽しかった。そこから町がで上がり、仕事も本格的に動き始めて、ベクトルが変わってきていると感じていました。コミュニティはこれからも必要だと思っていたので、誰かが動き出

すのを待つのではなく、自分で動こうと決めました。

丹野 僕が女川に移住してきたのが2020年。まさにコロナ禍のタイミングでした。震災後の女川のコミュニティは本当に魅力的で、外から来た僕でも自然と巻き込まれていきました。僕がアスヘノキボウに入ったのも、もっと仲間を増やしたかったから。まずは住む場所に関係なく、町に関わっている「活動人口」を増やす活動を進めています。また(崎村)周平さんたちの取り組みに強く賛同していますし、



さらに自分がその次の世代として引き継いで、女川を楽しい町にしていきたいと思っています。

竹谷 2018年に就職を機に女川に戻ってきて、若い人が多くなったというのが実感でした。駅前に「シーパルピア女川」「ハマテラス」もできて、町のイメージは大きく変わりました。

崎村 2015年のシーパルピア女川の完成は大きかったですね。震災前は地区ごとにコミュニティが分かれていたのですが、今は駅前に集約されて、顔を合わせる頻



Bar Sugar Shack 店主
おながわ盆踊り実行委員長
(おながわ) 崎村周平さん (43)

——プロフィール/業務内容——

女川町出身。「シュガーシャック」店主。震災後の復興期を支えた世代の背中を見て育ち、2024年に盆踊りを立ち上げた中心人物。世代や立場を越えて人を巻き込み、「女川を楽しむ町にする」を信条に活動を続けている。



度が圧倒的に増えた。これは女川の強みでもあると思います。僕は町外から来た人にも開かれている今の女川の方が圧倒的に好きですね。色々な人たちと出会えますし。

「顔が見えること」が大事

女川町にとっての原子力発電所とは

崎村 震災前は遠い存在だと思っていました。一方で、東京電力福島第一原子力発電所事故が考えるきっかけになり、女川原子力発電所が町の一部として成り

立っているとあらためて知るようになりました。店を営んでいるので東北電力社員の知り合いもいて、私はその人が好きになれば、その人がやっている仕事を応援しますよ。肩書きに関係はありません。その仕事を知りたくて、最近初めて発電所の見学にも行きました。そこで安全対策など「ちゃんとやってくれているんだな」と感じました。防潮堤もあって、要塞のイメージ。やはり、人がやっていることだから、社員の顔が見えないと不信感につながる。人としての距離が近いことって大事だと思います。

丹野 そのとおりですね。町と一緒に飲んだり、イベントをやったりして、日常の顔の見える人たちは信用できます。僕は石巻出身で、周囲に原子力関連事業で働く人は多かったため、発電所は近い存在で不信感はありませんでした。おそらく東北電力さんの事業や町とのつながりを理解していないと、危険性だけに目がいついてしまうのだと思いますね。

竹谷 ありがとうございます。東北電力グループは、「地域社会との共栄」が事業の根幹にあります。自分たちだけが発展すればよいとは考えていません。地域と同じ思いを持ち、地域との信頼関係を築いていきたいです。僕は2018年に入社し、24年の2号機再稼働にも運転員として関わりました。信頼いただくために成すべきことは安定したプラントの運転につきます。

しかし信頼を積み重ねるのは容易ではなく、そして失うのは一瞬です。再稼働の際には一時的に原子炉の停止が必要となる不具合がありました。それでも「次は頑張れよ」と地域の皆さんが後押ししてくれたのは、長い時間をかけて築いてきた信頼があったから。信頼を失わぬよう緊張感をもって日々臨んでいきたいです。

崎村 町にとっても、東北電力にとってもプラスになるようなWin-Winの関係になるのが一番いいと思いますね。

“楽しい”を原動力に

これからの女川をどう考えていますか

丹野 東日本大震災から学んだ教訓、人間の底力を言葉だけで伝承するには限界があります。アスヘノキボウでは、次の世代に受け継ぐため書籍や映像など形とし

て残すことを進めています。そして女川の基幹産業である水産業に、もっと光を当てたい。町の特産品である銀鮭を広げるため、2026年4月、シーパルピア女川に飲食もできる専門店「女川銀鮭広報部」をオープンしました。僕が店長を務めます。また個人的には、女川に「楽しい」と思える「場」を作っていきたい。そして、その「場」に関わる人を広げていくことが役割。色々な人の思いも繋いで。いつまでも女川の一員でいたいですね。

竹谷 我々は、皆さんが大好きな女川を奪う原子力災害だけは絶対に起こしてはいけません。あらためて胸に刻み直しました。女川には魅力がたくさんあります。それを今後どう活用していくか。何ができるかを問い続けていきたいと思っています。

崎村 たぶん町おこしにゴールなんてない。そして日本中で人口が減少していく中で、誰も解決策を見つけていないし、その答えをずっと模索していくのだと思います。それを諦めないことは大事だけど、「頑張れ」だけでは苦痛になるから、楽しみながらやっていくことが長期的な問題解決のアプローチになると思う。まずは自分が楽しむ。僕は“楽しい”を原動力に、これからも大好きな女川でやっていきます。



東北電力 女川原子力発電所 発電部(発電管理) 竹谷悠太さん (31)

——プロフィール/業務内容——

女川町出身。2018年に東北電力へ入社し、女川原子力発電所2号機の運転員に。2024年の2号機再稼働にも関わり、歴史的瞬間に立ち会った。家族と共に女川町で暮らし、地域行事にも積極的に参加する“地域の担い手”。



困難を乗り越え 東北の灯りを支えて

「女川原子力発電所」の足跡

東北電力の女川原子力発電所は、女川町をはじめ地域との信頼関係を築きながら、運転を進めてきました。東北・新潟への電気の供給を支える重要な電源として、地域と一体となり使命を果たしてきました。これまで、東日本大震災をはじめとした自然災害がありました。それらを乗り越えて今があります。これからも地域から信頼される発電所を目指し、地域社会に貢献していく方針です。

女川原子力発電所の歩み

- 1967年 4月 宮城県が女川の地点を「適地である」と発表
- 9月 女川町議会が原子力発電所誘致を決議
- 1968年 1月 東北電力が発電所建設地点として女川を決定
- 1970年12月 原子炉設置許可
- 1978年10月 宮城県、女川町と安全協定締結
- 1979年 3月 宮城県、牡鹿町(現石巻市)と安全協定締結
- 12月 本格工事着工(1号機原子炉建屋の基礎掘削工事開始)
- 1983年 4月 女川原子力PRセンターオープン
- 1984年 6月 1号機営業運転開始、女川原子力発電所発足
- 1989年 2月 2号機原子炉設置変更許可
- 8月 2号機着工
- 1995年 7月 2号機営業運転開始
- 1996年 4月 3号機原子炉設置変更許可
- 9月 3号機着工
- 2002年 1月 3号機営業運転開始
- 2011年 3月 東日本大震災発生。全号機の原子炉が設計どおり自動停止
- 2013年 5月 安全対策工事(防潮堤かさ上げ工事など)を開始
- 2013年12月 宮城県、女川町、石巻市へ2号機再稼働で事前協議申し入れ
- 12月 新規制基準に関わる2号機の原子炉設置変更許可、工事計画認可、原子炉施設保安規定変更認可を原子力規制委員会へ申請
- 2018年12月 1号機の運転を終了
- 2020年 2月 2号機原子炉設置変更許可
- 3月 1号機廃止措置計画認可
- 11月 宮城県、女川町、石巻市が2号機再稼働へ同意
- 2021年12月 2号機工事計画認可
- 2022年 1月 2号機の特定重大事故等対処施設(特重施設)設置を規制委へ申請
- 2023年 2月 2号機原子炉施設保安規定変更認可再稼働に必要な3許認可がそろそろ
- 10月 2号機の特重施設の原子炉設置変更許可
- 2024年 5月 2号機の安全対策工事が完了
- 11月 2号機再稼働(発電再開)
- 12月 2号機営業運転再開



2号機の原子炉格納容器据え付け工事



地域が楽しめるイベントも開催



マスコットキャラクターも登場



全戸訪問で丁寧に説明

震災時の女川原子力発電所

原子炉を安全に停止



体育館での避難生活

東日本大震災が発生した2011年3月11日、女川原子力発電所では1、3号機が通常運転中、2号機が原子炉起動中でした。震源から最も近かったものの、3基とも設計通り自動停止し、冷温停止へと導くことに成功しました。一方、津波により家屋が流されるなどした近隣住民が、PRセンターへ助けを求めてきましたが、PRセンターが停電・断水していたため、発電所構内にある体育館を開放しました(左の写真)。そこで約3カ月間、最大で364人が避難生活を送りました。東北電力では、避難してきた人々へ提供する物資の調達や、医療面でのケアが必要な人をヘリコプターで仙台市内の病院へ搬送するなど、全社を挙げてサポートしました。

町制施行100周年に寄せて

先達の思いを忘れず これからも地域とともに

女川町の町制施行100周年を、心よりお祝い申し上げます。地域の皆さまがこれまで築いてこられた歴史と文化、そしてその歩みに対して深い敬意を表します。

1968年に当社初の原子力発電所として、女川地点の立地を公表して以降、当社は女川原子力発電所に1号機から3号機を建設し、運営してまいりました。立地地域の皆さまには、これまで長きにわたりご理解とご協力を賜り、心から感謝を申し上げます。女川原子力発電所は、皆さまに温かく支えていただきながら、女川町とともに歩んでまいりました。特に、2011年3月11日に発生した東日本大震災では、町全体が甚大な被害を受ける中、発電所に避難された地域の皆さまと互いに支え合いながら災害を乗り越えることができ、その経験は私たちに“地域とともにある発電所”という思いをあらためて強く刻むものとなりました。

この教訓を胸に、2号機の再稼働を、先人の姿に学び地域との絆を強め、新たに生まれ変わる決意を込め、「再出発」と位置づけ、全社を挙げて安全性の向上に取り組み、2024年11月15日には東日本大震災から約14年ぶりとなる発電再開を実現することができました。当社は、地域の皆さまに信頼いただけるよう、「安全対策に終わりは無い」という確固たる信念のもと、これからも発電所の安全・安心の確保に力を尽くしてまいります。

そして、女川町のスローガンである「あたらしいスタートが世界一生まれる町へ」を皆さまとともに実現するため、当社も微力ながらその一端を担えるよう今後とも努めてまいります。引き続き、変わらぬご指導とお力添えを賜りますよう、心よりお願い申し上げます。



東北電力株式会社
代表取締役社長
社長執行役員 石山 一弘

再 出 発 !! 生まれ変わった女川原子力発電所

約14年を経て2号機再稼働

女川原子力発電所2号機は2024年11月、約14年の歳月を経て、再稼働(発電再開)を果たしました。震災前からの安全対策に加え、「地震・津波対策」「電源の確保」「冷却機能の確保」「閉込機能の確保」などの取り組みを強化しました。



高さ海拔29m、全長約800mの防潮堤をはじめとする様々な安全対策工事を実施し、生まれ変わった女川原子力発電所



2024年11月15日、
2号機は再稼働した(中央制御室)



防潮堤建設の様子



女川町は令和8年4月1日に町制施行100周年

女川町町制施行 100周年記念事業

女川町は町制施行100周年の節目を町民と祝うとともに、町全体で盛り上がるよう記念事業等を実施しています。2025年度は、「おながわ四季のまつり」をイベントと位置付けお祝い機運を醸成。2026年6月21日には記念式典を開催しました。

町制施行100周年記念ロゴマークを決定。
町内在住の佐藤 恵理 さんの作品が選ばれました。



女川町では、それぞれの季節の魅力を詰め込んだ「おながわ四季のまつり」が開催されています。3月の「おながわ春のまつり」では町内飲食店や特産品を扱うお店が多数出店するほか、津波避難の教訓を伝えるため、高台を目指して走るイベント「津波伝承女川復幸男」を開催。7月の「おながわみなと祭り」では大漁旗を掲げた船で獅子が踊る「海上獅子舞」や花火大会が見どころ。10月にはサンマなど秋の味覚を楽しむ「おながわ秋の収穫祭」が開かれます。「冬のまつり」は幻想的なイルミネーションが港町を彩ります。



おながわ
春のまつり



おながわ
みなと祭り



おながわ
秋の収穫祭



おながわ
冬のまつり



おながわたび



女川町観光協会公式情報サイト「おながわたび」。女川町観光協会がお送りする宮城県牡鹿郡女川町の観光、食、文化、イベントなどを発信しています。



ACCESS

女川町へのアクセス

鉄道(JR)を利用

- JR仙石線・仙石東北ライン
仙台駅～石巻駅(約60分)
- JR石巻線
石巻駅～女川駅(約30分)

自動車を利用

- 東北自動車道
仙台南IC～仙台南部・東部道路経由～三陸自動車道石巻女川IC(約1時間)
- 三陸自動車道
仙台北IC～石巻女川IC(約45分)